

〈論文〉

入門レベルの英語通訳ノートテイキング指導

熊谷 ユリヤ

1. はじめに

通訳者を介したコミュニケーションのうち、話者が一定の長さの発言をし、区切りで通訳者が発言の内容を訳出する逐次通訳は、同時通訳のような器材が不要であり、様々なレベルの通訳者が行うことが可能であるため、最も一般的に使用されている形態である。

逐次通訳のうち、発言者が複数の文章や、一つまたは複数の段落ごとに区切る場合、通訳者はノートテイキング（メモ取り）を行う事が一般的である。このノートテイキングは、通訳スキルの重要な基本の一つであるにもかかわらず、体系的に習うことなく、自己流や試行錯誤の末に取得した筆記法で行っている通訳者も少なくない。

本稿では、通訳学校における入門レベルの英語通訳クラスでのノートテイキング指導を考察する。具体的には、「通訳ノートの必要性」、「入門レベルに於ける通訳ノートテイキング－受講生側の視点」、「入門レベルにおける通訳ノートテイキング－指導者側の視点」、「ノートテイキングの基本原則」「入門レベル通訳ノート指導の実際」の各項目を扱う。このため、著者が教務顧問・特別講師として教材選定・作成・レッスンプラン・非常勤講師ティーチングマニュアル作成など授業内容全般を監修する通訳学校「北海道通訳アカデミー（以下「アカデミー」）」（120名 9クラス 5レベル）の課程のうち、入門・基礎レベル4クラスの指導内容を引用して考察したい。尚、これら2レベルのクラスの指導法の枠組は、札幌大学および北海道大学で筆者が担当する通訳関連の授業にも応用されている。

2. 通訳ノートの必要性

2-1. 通訳ノートとは

セレスコヴィッチによれば、通訳は「言語そのものよりも、実際の発話で表現された『アイデア』に焦点を合わせる。また、『言語的等価性』を見つけようとする、あらゆる試みを全く無視し、ある時点、ある文脈での、ある意味を伝える適切な表現を見つけることに集中する」行為である。

つまり、通訳とは、意味の等価性を追求する作業なのである。また、通訳の過程は、以下の三つの段階で構成されている。

- 1) 意味を担う言語的発話の聴覚的知覚。
- 2) 言語の理解と、分析と解釈の過程を通じたメッセージの理解。
- 3) 言葉による表現の即座の、そして意識的な放棄。そしてアイデア・意味・概念など話し手が伝えたいメッセージの心的表象の保持。

筆者の通訳学校での恩師、西山千氏は、「逐次通訳の訳出は、そのまま印刷して出版してもいいくらい、自然で完璧なものでなければなりません」と話された。つまり、「通訳する前の言語（起点言語）しか話せない話し手が、もし通訳者が訳出する言語（目標言語）を話すことが出来たなら、このように話すであろう」というような自然な話し方で、発言の内容・意図・感情などを正確に再現し、「意味の等価」が達成されることが通訳の目的である。

起点言語での発言が行われた直後、瞬時にこの作業を連続的に繰り返して目標言語に訳出していく同時通訳とは異なり、一定の長さの意味の塊ごとに区切ってこの作業を行う逐次通訳において、短期記憶あるいは、区切りまでの長さによっては中期記憶保持の補助となるのが、通訳ノート、あるいは通訳メモである。

2-1. 通訳ノートが必要な理由

逐次通訳の際、状況に応じて発言の間じゅう、理解したことを記憶していくが、この作業記憶の負担を軽減に必要となるのが通訳ノートである。

すなわち、ノートテイキングのトレーニングを受けた通訳は、話者の言葉を一字一句、文字通り訳すものでは決してない。「アクティヴ・リスニング」とも呼ばれる能動的リスニングを行い、瞬時に理解した内容・論理・話し手の意図等を分析・整理して記憶しつつ、その記憶の補助として「通訳ノートテイキング」をし、話者の発言が終わり次第速やかに目標言語に意味の等価として訳出するのである。

「発言者が複数の文章や、一つまたは複数の段落ごとに区切って話す」時間は、数十秒から数分間、長い場合は、5分間以上になることもある。このような一定以上の発言を通訳するためには、当然すべてを正確に記憶して自然に訳すことは不可能であるため、記憶の補助としてのノートテイキング・スキルが必要となる。

つまり、逐次通訳をする際に、通訳者がオリジナル発言の内容を記憶の補助としてメモするスキルであるが、発言を一字一句漏らさず書き取る速記や音声すべてを文字にするディクテーションとは正反対である。むしろ、聞いたことをすべて書き取るべきではない。

2-3. 入門レベルの通訳ノートテイキング・トレーニングの必要性

ノートテイキングのスキルがない通訳者は、話し手の発言の一文が完結する前に、途中で割り込んでフレーズごとの通訳をする ad hoc 通訳をするか、一つの文を話し終えて次の文を続けようとする話し手を遮って通訳することになる。その場合、話し手の思考が絶えず中断されてしまい、オーディエンスは断片的な直訳を聞かされることで、集中力を必要とし、疲れてしまう。

あるいは、ノートテイキングが追いつかない場合は、発言の内容や意図を正確に再現できず、思い出せる部分だけまとめて訳すか、覚えていない部分は自分の想像で補って訳さなければならない。ボランティア通訳者や経験の浅い通訳者がスポーツ大会の勝利者インタビューをする際に時折見られるように、どう考えても外国語の発言に対して通訳の長さの三分の一から半分しかない、あるいは、違う言葉や言い回しが聞こえるにもかかわらず、同じ訳が繰り返されるというケースがこれにあたる。

トレーニングを受けなくても、試行錯誤を重ねて経験的にその手法を身に着けることは可能であるが、正確で自然な逐次通訳を効率的に習得するためには、ノートテイキング・スキルのためのトレーニングが必要である。

2-4. 中級レベル・上級レベルのノートテイキング

入門レベルでは、数分間続くような発言や、抽象的な語彙や専門性の高いノートの必要性の理由としては、わざわざプロの通訳者を雇用して業務をしてもらう対象としての発言者は、特定の学術分野の専門家であったり、ビジネス通訳であれば、その役職やプロジェクトや契約にとって重要な人物であることが考えられる。

反面、多くのフリーランス通訳者は、毎回様々な専門分野に直面し、たとえ語学や通訳スキルの専門職ではあっても、多くの場合、話者の専門分野に関しては専門外であるため、知識を補うための背景知識の予習のほかに、記憶の補助手段としてのノートに頼る必要がある。

それに対して、特定の公共サービス、エスコート、医療、ビジネス、ガイド、学校教育などでの通訳を含むコミュニティ通訳の専従通訳者、企業内通訳者、VIPやエグゼクティブの専属通訳者、長期プロジェクトの専従通訳者であれば、背景知識や専門とする分野の通訳に関しては、数字や固有名詞、新出トピック以外はそれ程ノートに頼らなくても通訳が可能である。

通訳者が逐次通訳を行う場合、起点言語が発せられてから目標言語の訳出までの時差を補い、少しでも早く相手側の発言の要旨を伝えるため、通訳対象者が通訳者の左側に座り、相手側が発言している間に瞬時に目標言語に瞬時に変換して書いたノートを見せるというケースもある。また、同時通訳の場合も、一人が訳出している間、パートナーが数字や固有名詞を念のためメモして、求められれば相手に見せる。通常、逐次通訳のノートは通訳者本人が理解できれば目的が達せられるが、これらの手法は、人に見せるノートとして、さらに高度なトレーニングが必要となるケースもある。

3. 入門レベルにおける通訳ノートテイキング－受講生の視点

3-1. 入門レベルクラスを受講生とは

通訳学校における「入門レベルクラスを受講生」と一口に言っても、英語力がようやく通訳を学ぶレベルに達した、全くの初心者と、英語力は高いが通訳初心者、そして、すでに個人的ルートや企業内で通訳業務はしているものの、トレーニングを受けたことがなく、

自己流が行き詰って学校に通い始めた人、など様々なケースが考えられる。

中には、別の通訳学校に通っていたが、ただ音声や動画を訳して訂正するだけの昔ながらの指導法で、ノートテイキングなどのスキル指導が不十分であるため、必要に迫られて転校してきたという人もいて、トレーニング初心者ではないが、ノートテイキング・トレーニングの初心者というケースもある。

3-2. ノートテイキング指導の需要

どのタイプの受講生にも共通して言えることだが、アンケートによれば、ノートテイキングは、入門から基礎レベルクラスの受講生が学びたいスキルとして、最もリクエストが多い分野である。

その理由としては、初習者にとって、通訳メモは、通訳者の象徴と言えるツールであり、ともすれば、英語ができて通訳メモが取れば、通訳ができると勘違いしがちである。一方、これまで通訳トレーニングを受けてこなかった自己流の通訳者たちは、失敗や行き詰まりの原因が、間違ったノートテイキング法やノート訓練の欠如ではないかと感じている場合が多いからである。

3-3. ノートテイキングの導入時期

通訳指導者の間では、ノートテイキング導入の時期に関して意見の相違がある。また、同じ指導者でも、教える対象が大学生が通訳学校の受講生かによっても異なる。筆者も大学ではセメスタの3分の一を過ぎたところでメモ取りを導入するが、通訳学校では、入門時点での現状を知る意味と、ある程度トレーニングが進んだ段階で振り返って進歩を実感させるため、学期の初めに、一切のルールも説明せずに、白紙の状態、英語を聞いて通訳ノートをとってもらうことにしている。

その後は、ベルジュロ伊藤、鶴田、内藤（2009）で詳説されている作業記憶の訓練を行い、段階的にノートテイキングを取り入れていくが、受講生のアンケート結果や直接のリクエストもあり、筆者が理想と考える時期よりは比較的早い段階で、後述するキーノートメモ、イメージメモなど2文から3文のメモ取りを行う。これは筆者が指導する通訳学校は、毎年度一つずつ新設のクラスを開講しているが、それ以外の基礎レベルクラスでは、継続生と新生が混在していることも上期のような導入時期となる遠因である。

3-4. 初心者のノートの特徴

ノートテイキング初習者は、聞いた英語を理解する前に、次々にディクテーションのように全てを書き取ろうとして、結局追いつかなくなる。また、書く作業に集中するあまり、「聴けない⇒聞けたことをそのまま書いたのでは間に合わない⇒かろうじて書けたものの解読できない⇒書いたこと以外は覚えていない⇒訳せない」という悪循環に陥ってしまうケースが多い。

その後、入門レベルの受講生に対して、「ノートを縦半分に分割して左上から縦にメモを取る」「すべてを書き取るのではなくキーワードのみ」「画数の多い漢字は使わない」「並列・羅列は縦に箇条書き」「文章の終わりや大きな意味の区切りをマークする」などの基本的なルールや枠組みを説明する。しかしながら、新入生たちは、ホワイトボードを使用した講師によるノートテイキングのデモンストレーションや、同じクラスに在籍する継続生のノートテイキング添削を行った場合、略語や記号などの細部にのみ関心を持つ傾向がある。

4. 通訳ノートテイキング－指導者側

4-1. 通訳学校の講師

通訳学校の講師は、殆どが現役通訳者であり、その多くが会議通訳者であると言われている。会議通訳者は、同時通訳を行うことができる出来るレベルの通訳者であるが、逐次通訳による会議や式典、記者会見などではノートテイキングをする。

講師自身のノートテイキング・スキル取得は、「海外・または国内の大学・大学院で理論から学んだ」「民間の通訳者養成学校で実践を学んだ」「試行錯誤の末、自ら開発した手法でノートテイキングをする」の三つに大別される。

4-2. 通訳ノートを見せたくない理由

北海道通訳アカデミーを例にとると、非常勤講師たちにホワイトボードを使用した通訳ノートテイキングのデモンストレーションや、受講生がボードにとったメモを添削していただくようにレッスンプランでお願いしてあっても、通訳アカデミーで初めてノートテイキングを学んだ講師以外には、なかなか実行してもらえないという。

その理由は次の3つに大別できる：

- a) そもそも通訳ノートは人に見せるものではない
(通訳者により手法や英語レベルが異なるノートテイキングは、あくまでも記憶を補助するためのメモであり、万人に当てはまる普遍的な記号は少ないと考えている。各学習者や通訳者が、その状況に応じて工夫し、使用すべきと考えている)
- b) 下手で(あるいは雑然としていて)恥ずかしい
(できれば見せたいが、自信がない。特に、ホワイトボード上でメモ取りのプロセスを見られるのは気が重い)
- c) 通訳者にとっての企業秘密なので見せたくない
(試行錯誤して、あるいは基礎を学んだ上、工夫に工夫を重ねて開発したメモ記号や略語、空間使用などを簡単に開示したくない。苦勞してたどり着いたノートだからこそ覚えられるもので、写して真似をするだけでは定着せず、受講生にとっても良いことではない)

4-3. 通訳ノート指導に対する考え方

伝統的な教授法で学んだ講師の多くは、積極的には通訳のノートテイキングを教えたかららない。筆者自身も通訳学校の先生に、「何ですかそれは？英文速記ですか？ただたくさん書けば良いというものではありません。」と注意は受けたものの、具体的な指導は無かった。「人様に見せるものではなく、自分が分かればいいので、自分で工夫してください」と言われたに過ぎない。

他の通訳学校で学んだ通訳者も、「ノートテイキングは一種の職人芸だが、人様の芸を盗むのではなく、自分で編み出すべき。」「観光地、イベントの種類、ビジネスの業種、講演の演者の専門分野など、分野が異なれば独自の記号を大幅に再定義しなければならないため、他人のノートは見ても参考にならない。」と言われた記憶があるという。

自分の通訳メモを自信をもって開示できる通訳者は、限られている。民間の通訳学校や大学の通訳講座で、理論から体系的に指導するケースも増えている一方、聞き取りや検索からは、ノートを見せたがらない現役通訳者が指導するケースも依然として多く存在することが窺い知れる。

4-4. 進化する通訳ノート

筆者自身は、毎回授業でホワイトボードでのノートテイキング・デモンストレーション

や、受講生が取ったノートの添削を行うものの、それが皆にとって絶対的とは限らないことを繰り返し伝え、常に新たなピクトグラムを加えたり、構成の工夫に修正を加えている。

発話のトピック、スピーチやプレゼンのテーマ、発話者が区切る意味の塊（チャンク）や各通訳者の情報保持力や背景知識レベル、外国語レベルの違いによっても、ノートテイキング法や筆記する形式、どの程度記憶し、どの程度書き留めるかの分量が異なる。

そのため、教師が受講生の教本やマニュアルを作成したとしても、その時に扱った特定の文章についてその通訳者にとっての、その例文に対するノートを例示するに過ぎないことになる。進化し続けるということは、すなわち常に暫定的である完成しないということでもある。そのあたりが、積極的には開示したくない通訳者も多い理由ではないだろうか。

4-5. ノートテイキング DVD 付き教科書

そのような状況の中で、著名な通訳者であり通訳教育者による、実際のノートテイキングのプロセスと解説の映像を DVD に収録して添付した画期的な教科書、『よくわかる逐次通訳』が出版されたのは 2009 のことである。パリ第 3 大学通訳翻訳高等学院 (E S I T) と東京外国語大学大学院での実際のノート指導の理論から、様々なスピーチ例による実践まで体験できる画期的なものである。

残念ながら、北海道通訳アカデミーでは 6 年前にこのテキストを使用したのが、プロデビューしたのちも継続して在籍している受講生も少なくないこと、一度使用したテキストは使用しない方針であるため、このテキストで学んだ Rozan の基本原則をはじめ理論は引き続き “Rozan, J-F THE SEVEN PRINCIPLES, Note-taking in Consecutive Interpreting” 等の資料から引用して指導しつつ、続篇や類似の教材を待ち望んでいるところである。

5. 通訳ノートテイキングの基本原則

5-1. 通訳ノートはどちらの言語で取るか

通訳ノートを取る際に、起点言語 (SL) と目標言語 (TL) のどちらの言語で取るかについて、1956 年に通訳教本のバイブル的教本『逐次通訳のノートテイキング』を出版したジャン＝フランソワ・ロザン (Rozan) は、その著書の中で、目標言語 (TL) で取ることを提唱している。Rozan の場合は、フランス語と英語というアルファベット言語間のノートであったこと、瞬時に目標言語で理解してメモを取ることが出来るパイリンガル

や準バイリンガルレベルの人に対する指導であったことが考えられるので、訳出までの時間短縮のために、このように提唱したと思われる。一方、日本人は画数の少ない漢字を使えて便利であることと、受講生の中には瞬時に目標言語にして記していないケースもあるため、アカデミーでは、TL/SL/第三言語の混合メモを勧めている。ただし、先に述べた、「相手側話者の発話の内容を口頭訳される前に知りたいクライアント」の場合は、極力、第三言語を避けて理解しや TL でのノートテイキングを行うように指導しているが、入門レベルではそのような指導しない。

5-2. Rozan 7 つの原則

非常にシンプルな幾つかの原則 / 原理を学ぶことで、このシステムに健全性と精度がもたらされる」と記されている Rozan 原則は、1) 単語 / 言葉 / 言語ではなくアイデアを書き留めること 2) 省略語のルール 3) リンク 4) 否定 5) 強調を付加すること 7) シフト (字下げ) の7項目から成っている。

5-2-a. Rozan 原則 -1

「単語 / 言葉 / 言語ではなくアイデアを書き留めること」は、通訳ノート入門レベルの学習者が最も苦手とするところである。そのため、前出の通訳学校の入門・基礎レベルコースでは、「学校の講義ノートのように多くを記述しても良いと」という誤ったニュアンスを避けるため、敢えて「ノートテイキング」とは呼ばずに「通訳メモ取り」と呼んでいる。

書き過ぎは、「音のチャンクを分解して、機能語などの聞こえない音をすべて書き出すことで効率が悪い」という批判も多い「ディクテーション」の後遺症というケースもあるようだ。「自然なスピードの発話で話される一定以上の長さの発話を取りあえず書き取る」ということで、後半が殆ど記憶に残らないばかりでなく、書きなぐった単語の羅列は、本来もっとも重要な要素である文脈を離れてしまう。

これを回避するため、アイデアをストーリーの構造を生かして空間配列し、シンプルな記号や略語や文字で記すことが、「言語的等価」を求める直訳を避け、「意味的等価」を達成する効率的な方法であることを体験させる。

5-2-b. Rozan 原則 -2

「略語のルール」は、記載するキーワードの分量削減に有効ではあるものの、
ルール A: もし時間があればできるだけ完全な形で単語を書き留めるが、省略しなければ

ならない場合は語頭と語尾のいくつかの文字を書き留める

例) Prod. (production=生産, producer=生産者, product=製品, productivity=生産性)

といった語と混同するおそれがあるため、曖昧さ回避の目的で、それぞれ語頭と語尾の数文字を用いて Pron, Prer, Prct, Prvity と書き留めることが望ましい

に関しては、日本語の強みを生かしたシンプルな漢字やかなで代用することで、更に効率化を図る方法を指導する

B. 男性名詞、女性名詞や時制（過去に d 未来形に 11）を示す

については、日本語と英語の間ではほとんど考える必要がなく、時制のみ活用できる

C. 文字数の多い単語やイディオムを簡潔な同義語で置き換えること

例)・“which are worth looking at (一見の価値がある)”を

“interesting (興味深い) の語頭 2 文字と語尾 2 文字をとって “*intg*”

と記載するというルールは、視線を表すシンプルなピクトグラムで代用が可能である。

5-2-c. Rozan 原則 -3

「リンク／つながり」のルールは、文脈、論理のつながりや構成を示すもので、多くの記号が活用できるので、これに図式の要素が分かりやすいものや漢字を追加して使用するよう指導している。矢印、「×」、「∴」（ゆえに）、「<」、「>」などの数学記号を用いてストーリーと文脈の流れを把握する。but on the other hand, but, nevertheless, however などは、両側に矢じりのついた 矢印 ⇔ ↔ で上下を分割して対比をはっきりさせることもある。「□」国（内）、「▣」海外・国際も効率的である。

5-2-d. Rozan 原則 -4

「否定」は、否定されるものに横線を引いて消す方法が提唱されているが、初心者は、下に何が書かれたかを見失うこともあるので、否定の度合いによって大きさの異なる×を、否定される対象の前（左側）に書くように指導している。

5-2-e. Rozan 原則 -5

「強調」を表すためには、「強調される対象部分に下線を引く」というルールはどのレベルのノートテイキングにも非常に有用である。ただし、最上級に二重下線を用いるというルールは、アルファベット文字の略語が少ない漢字活用型ノートの場合、どこに二重下線を引くかわからないという声があったため、矢印の頂点に線を引いてそれ以上行くことが出来ない様子を表す記号を用いることが多い（手書きメモ参照）。弱めや推量表現の際に

点線の下線を使用するというルールについては、△や { } で代用する。

5-2-f. Rozan 原則 -6

「縦書き」通訳ノートについては、書きすぎ防止と、論理の流れを見出し的に把握しやすくする効果のために、縦書きが一般的である。

5-2-g. Rozan 原則 -7

「シフト / 文字下げ」について、ノート入門レベルの学習者は、縦書きと指示されると講師の見本では、狭い縦長の枠の中でも、たとえば「主部」(左上)、「述部」(その下中央付近)、「詳細情報 / 目的語 / 例」(その下右)の順に斜めに記述されているにもかかわらず、左側に垂直に一列に書いてしまう傾向がある。後述の手書きメモのように、空間配置にも意味を持たせて文脈やストーリーを表すことや、箇条書きの位置を工夫することで、視覚的にも、「意味の等価」を達成しやすいノートが可能となる。

5-3. Rozan10 の基本記号

Rozan7つの原則に加えて、Rozan10の基本記号に含まれる「:」考える、「”」言う、「/」なども、アカデミーでのノートテイキング・デモンストレーションの中で生まれて有用と認められた他の数学記号、発音記号、地図記号、天気記号、ピクトグラムと共に活用されている。

6. 入門レベル通訳ノート指導の実際

6-1. 作業記憶の訓練

授業開始の早い段階において、「ある程度の長さやナチュラルスピードのメモ取り」を自由に行わせて、ディクテーションタイプの書きなぐりを行ってはいならない理由を、身をもって体験してもらったあとで、作業記憶の訓練に入る。

単文から次第に複数の文章の数を増やし、白紙の背景を見つめてビジュアル化しながらストーリーを理解し、理解したものの中から、忘れないようにキーワードを指を折って数えてながらリテンションして記憶にとどめ口頭で再現する、リプロダクション訓練や、ストーリーを聞き終えてから時間を区切って、メモではなく、イラストを描く訓練も行う。

6-2. テーマのあるノートテイキング

次に、人名や地名、国名その他固有名詞や簡単な数字や年のみ書き取りを許されるノートテイキングを行う場合は、それらが発言のどの部分に出てきたかも考慮して、空間配置を行い、分の区切りも入れるように指導する。一方、それら要素が一切無い文を使用して、構成のみのスケルトンメモを取ることも有効である。

6-3. 後追いメモ、ストーリーメモ

また、ストーリー性のある文や、周辺言語や表情が豊かなビデオ教材を利用して、細部にこだわらずに全体の発言の意図を集中ながら「アクティブ・リスニング」を行い、発言終了時に30秒間で、優先順位をつけて空間配置していく「後追いメモ」は、書きすぎ防止にも非常に有効である。

6-4. ピクチャーメモ、ビジュアルメモの訓練と定義

上記のようなステップを経て、いよいよ実際の逐次通訳ノートテイキングを行う前に、予め素材の候補を与えて、瞬間的に自分で類出が予想される語やコンセプトを表す記号や略語を定義する。また、ノートテイキングの際は、二人ずつ前に出てホワイトボードに書いたものを、基本原則が守られているかどうかの視点から添削する。たとえば、文字の大きさ、空間配置、画数の少ない、あるいは簡略された漢字やかなかどうか、一文字で思い出せるものを全て書いてしまっていないか、などの視点である。着席している残りの受講生は、お互いに、ノートを交換して基本原則が守られているかどうかの赤ペンチェックを行う。

添削の合間に、もし筆者がとるとしたら、こういうノートですという、押しつけではないような入門レベルのノートテイキングのデモンストレーションも行う。

次の3ページに掲載されているのは、筆者が実際に教室でビデオを流しながら取った、入門レベル向けの通訳ノートである。中級、上級レベルに進んでいくうちに、抽象的な語彙や複雑な論理の構成のせいで、次第に文字が若干多くはなる。しかし、基本をしっかり押さえておけば、かつての筆者のような英文速記型殴り書きメモを予防できる。

7-1. 入門レベルのノートテイキング例1 (英日)

訳: 日本で一番気に入っているものはコンビニです。日本はコンビニが多く、一ブロックに一つはあります。ローソン、セブンイレブン、サンクス、ファミリーマートなどがあります。日本のコンビニは文字通り「コンビニエント」つまり「便利」です。それに対して、アメリカのコンビニは、小さくて、品数も少なく、値段は高くて店員はフレンドリーとは言えません。| 日本のコンビニの店員さんはとても親切です。何か質問をされると、わざわざ、その品物のところまで連れて行ってここですと教えてくれます。特に気に入っているのは、雑誌の立ち読みが堂々と出来ること、カラーコピーが取れること、usbメモリースティックからワードが印刷できること、写真もプリントできることです。そして、食べ物や飲み物の他にカワイイ製品を扱っているところも好きです。アメリカに帰国したら日本のコンビニが懐かしくなると思います。

The handwritten notes are as follows:

- Left Column (Japanese notes):**
 - Top: J ↑ ♥ J_s ,
 - Middle: タ 1/70 } { ロー, ヲ, ン, ン, ン } ,
 - Bottom: J] = "conv'it" ↓ US] { 小, 品少, \$ ↑, J_h X友 } ,
- Right Column (English notes):**
 - Top: J ↓k ≈ ,
 - Middle: Q → / } ,
 - Bottom: !♥ [] 人 } { + カラ [] , usb → W } , pto ,
 - Bottom: [] + カワイー 品 ,
 - Bottom: → US : ' ^ ,

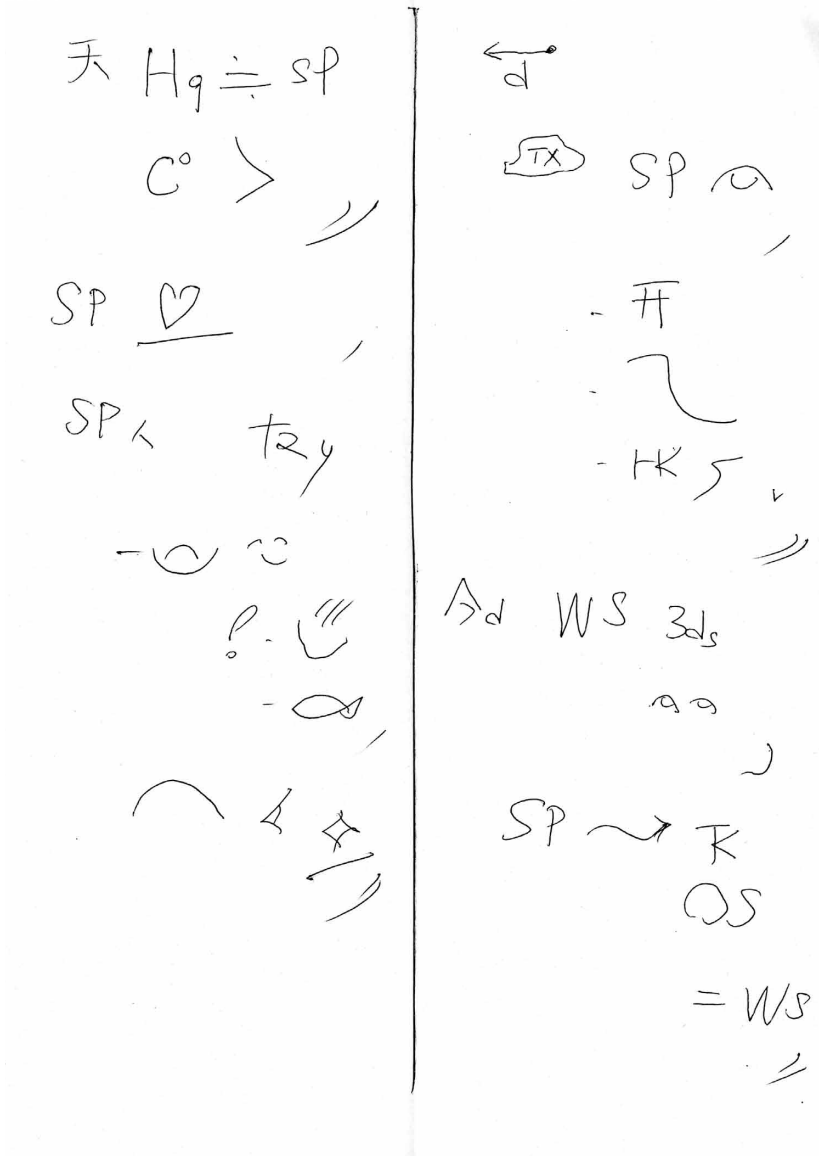
8-1. 入門レベルのノートテイキング例 2-a (英日)

訳: こちらに何うことが出来て嬉しいです。お招き有難うございます。香港から参りました, コーリン・ヤンと申します。3D プリンティング社はアメリカに本社がある会社です。私はアジア太平洋地域の責任者で, 管轄している国・地域は, 香港, 日本, 中国, 台湾, マレーシア, シンガポール, フィリピン, タイ, そして, オーストラリアとニュージーランドです。| 家族は香港に住んでいて, 子供が4人います。息子二人は社会人で, 長男はキャセイ・パシフィックでパイロットをしています。長女は看護学校の学生で, 次女はまだ高校生です。私にとって, 札幌訪問はこれが二度目です。最初は2011年の12月で大雪でした。今回は, 10月ですので, 紅葉が綺麗ですね。

<p>☺ ☺</p> <p>☑ 日 //</p> <p>Hg → J-リ = ヤン</p> <p>3DP</p> <p>HQ → US</p> <p>As Pa 人</p> <p> { Hg J Φ S マ ニ リ ア + Au NZ } </p>	<p>人 Hg</p> <p>4子</p> <p>($\frac{2}{4}$ 日)</p> <p>↑ CX</p> <p>- 2↑ D</p> <p>↓ D H.S.</p> <p>→ SP 2nd</p> <p>- 1st '11.12</p> <p>今 10</p>
--	---

8-2. 入門レベルのノートテイキング例 2-b (英日)

訳: この時期, 香港と札幌の天気は似ています。気温は向こうの方が高いです。私は札幌が大好きです。札幌の皆様はフレンドリーですし, 食べ物, 特にラーメンとシーフードが美味しいですし, 山があって景色がとてもきれいです。| 昨日はタクシーで札幌観光をしました。北海道神宮, 大倉山ジャンプ台, 北海道開拓の村を回りました。今日から始まる三日間のワークショップを楽しみにしていました。札幌のあと, 東京と大阪でも同内容のワークショップを開催することになっています。



9. おわりに

通訳学校の受講生には、自宅学習としてその日の授業で使用した音源と動画のすべてについて、「理想の通訳ノート作成」の課題を課している。この場合の「理想」の意味合いは、その受講生にとって、その音源で、その段階で取るノートとしては、何が理想の部品/素材であり、理想の構造であるか、という試行錯誤を繰り返して、逐次通訳のツールとしてのノートテイキングを身に付けてほしいという意味である。

筆者はノートテイキングを体系的に習ったことが全くなく、テキストもなかったため、英文速記と間違われるような殴り書きのノートをとって、長年苦勞をしてきた。逐次通訳よりも同時通訳が業務の中心になった時、メモ取りから解放され、肩の荷が下りた気がした覚えがある。

大学や通訳学校で指導するようになり、必要に迫られて体系的に学び始めたが、「修業時代にこういうトレーニングを受けていたら」と悔やまれる。その分、学生や受講生には、効率的で記憶負荷が軽減される逐次通訳を行えるようなノートを指導していきたい。今後とも、西欧の理論に学びつつも、日⇄英通訳に適したノートテイキングの研究を続けていきたい所存である。

< 参考文献 >

- ・熊谷ユリヤ 「通訳教育の諸相」(2013, 『札幌大学総合論叢 第35号』)
- ・篠田顕子, 新崎隆子 『英語は女を変える—同時通訳者が見たコミュニケーションの不思議』(1992, はまの出版)
- ・セレスコヴィッチ, ダニツァ 著 / ベルジュロ伊藤宏美 訳 『会議通訳者』—国際会議における通訳
L'interprete dans les conferences internationals (2009, 研究社)
- ・染谷泰正 「通訳ノートテイキングの理論のための試論——認知言語学的考察」(2005)
- ・永田小絵 「逐次通訳のノートテイキング指導」(1998)
- ・原不二子 『通訳という仕事』(1994, ジャパンタイムズ)
- ・ベルジュロ伊藤宏美, 鶴田知佳子, 内藤稔 『よくわかる逐次通訳』(2009, 東京外国語大学出版会)
- ・ポェヒハッカー, フランツ 著, 鳥飼 玖美子 監修 『通訳学入門』(2012, みすず書房)

< 参考ウェブサイト >

- ・北海道通訳アカデミー
<http://www.hokkaido-ia.jp/> (2015.01.05)
- ・Rozan, J-F THE SEVEN PRINCIPLES, Note-taking in Consecutive Interpreting
<http://interpreters.free.fr/consecnotes/rozan7principles.pdf> (2015.01.03 23:32)